

保育実践につながる「場」としての造形ワークショップ

江村和彦

1. はじめに

幼稚園・保育園での子どもたちの生活の中で造形表現活動は、身体的表現、音楽的表現と並び重要な位置を占めている。幼稚園教育要領・保育所保育指針の「表現」のねらいでも「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と示されている。子どもたちが自然や身の回りの出来事に心を動かされ、その感動や思いは歌ったり、体を動かしたり、絵を描くなどの表現行為として現れる。保育者は子どもたちの表現行為を認め、適確に援助することが求められている。しかし、様々な経験や造形技能を踏まえた上での援助が出来るようになるには、保育者養成の短期大学・大学・専門学校での造形表現の授業を受けている程度では到底及ばない。また学生は高等学校までに図画工作や美術から遠ざかったことや、評価を気にする余り消極的になり、やがて苦手と思うようになってしまうこともある。保育者養成校での造形表現の授業でも製作において見本などを模倣したり、同じ動物のものを作ったり創造性、積極性に欠ける傾向が見られる。仮に評価のない開放された表現活動を楽しむところから工作・描画活動・造形を捉えることができれば、造形表現をより意欲的に取り組めるのではないか。その観点から「ワークショップ」という活動の場が学生自身の造形表現能力の向上や表現する行為そのものに関心を持つきっかけになると考える。本研究では造形に関わるワークショップが、参加した学生たちにとって造形的技能の向上だけでなく、子どもたちの創作活動を導き、表現活動を援助する力を育てる場としてどのように機能しているか、実践事例をもとに検討していきたい。

2. 学生の造形に対する意識

(1) 実習での造形活動アンケート

幼稚園実習での子どもたちとの関わりの中で主に造形に関するアンケートを行なった。2回のアンケート調査から子どもたちとの造形活動の中で大学生に必要な事は何かを探りたい。

2010-7月22日 大学2年生17名, 11月22日 大学2年生13名

幼稚園実習中で造形に関するアンケート

○うまくいったこと

- ・自分が描いている姿を見て描きたいと言ってきて嬉しかった
- ・説明を理解してくれた

●うまくいかなかったこと

- ・声かけが足りなかった
- ・時間が短かった
- ・導入をどうすれば決めてよかった
- ・もう少し自分で作ってみて説明できればよかった
- ・年齢にあった制作がひらめかなかった
- ・はさみの動かし方がうまく教えられなかった
- ・作り方の説明が上手く伝わらずあきらめる子がいた
- ・紙コップがのりでボロボロになった
- ・折り紙の折り方の説明に困った
- ・折り紙のレパートリーに困った
- ・作ったおもちゃを直すのが大変だった
- ・子どもの使うのりが接着に不向き
- ・じょうずな援助ができなかった
- ・積極的に子どもたちに関わりどんな絵を描いているのか聞いたりした

(2) 実習体験で問題点

アンケートからは大きく2点の問題が浮かび上がった。

- 1) 造形技能に関する問題・・・折り紙の折り方やはさみの動かし方、のりの使い方など
- 2) 子どもの活動援助に関する問題・・・声かけや導入、説明の難しさなど

造形技能に関する問題は、授業での材料体験や製作の充実を図ることや個人の繰り返しによる技術の習得で補うことが重要である。一つの素材を取り上げてもその表現の多様性から大学の授業時間内では対応しきれない。日々の積み重ねでそれらの技法や指導法を習得していくしか方法はないと考える。

一方子どもへの声かけや説明の仕方は実践を積み重ねることや、子どもたちとの関わりの機会を多く取ることが求められる。実習以外に子どもたちと関わることがなければ、どのような表現をするのか想像することが困難になる。そのためにも様々な環境で子どもたちと関わる機会を設け、経験を重ねることが大学生たちに実践力をつけることになる。そのきっかけとして「ワークショップ」と呼ばれる緩やかな学びの場の中に大学生たちが参加することが、新たなコミュニケ

ーション体験を得ることができ、子どもたちとの関係作りに目覚めていくことに期待する仕組みであると考える。

3. ワークショップ

(1) ワークショップの定義

ワークショップは現在大学、企業、社会教育活動などの場面で、様々な形式で行われているが本来はどういうものなのか。中野民夫は著書「ワークショップー新しい学びと創造の場ー」岩波新書¹の中で「ワークショップとは参加者が受身でなく、積極的に関わる研究集会のことである。」と述べている。英語で「workshop」はもともと「作業場」「仕事場」という意味であり、それが転じて「研究集会」を意味するようになった。そこからワークショップは「共同作業によって何らかの情報を生み出す場とその仕組み」であり、参加者は「あらかじめ答えのないことを共同で考えていくこと」と著している。

つまり学校などで教師が生徒、児童に知識・教養を講義するような一方通行の教え方というより、一つの問題に対して情報を共有しながらみんなで協議しながら解決していく形が「ワークショップ」だと言える。

(2) ワークショップの分類

また、中野はワークショップの分類においては以下の様に分類している。

- ①アート系・・・演劇、ダンス、美術、音楽、工芸、自己表現
- ②まちづくり系・・・住民参加のまちづくり、コミュニティづくり、政策づくり
- ③社会変革系・・・開発教育、国際理解教育、平和、人権教育
- ④自然環境・・・「環境教育」自然学校、人間相互の関係を含めた人間と自然とのワークショップ、間の関係を改善していくプロセス
- ⑤教育・学習系・・・学校教育、社会教育、企業研修、国際会議
- ⑥精神世界・・・事故成長、事故変容、こころとからだ、人間関係、心理学
- ⑦統合系・・・⑥精神世界系+③社会変革系の統合型

「ワークショップー新しい学びと創造の場ー」P19-20参考

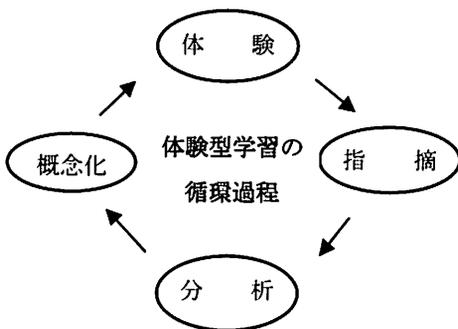
筆者が実践している造形ワークショップは、ものを作ることを通じて子どもたちの造形活動を展開している。中野の分類に照らし合せれば美術、工芸、自己表現の点で①アート系に該当する。ただし②のまちづくり系や③自然環境系とも密接に関わりを持っていると考える。筆者が2010年に関わったワークショップは、商店街のコミュニティスペースとしてギャラリーがつくられ、そこでの展示会と子どもたちと焼きもの製作体験を行なった。それは商店街の活性化、まちづくりの観点から、展示作品と作家を中心とした人びとの交流の場として機能しているところから②まちづくり系に関わる。また科学館での海の生き物のおもちゃを牛乳パックで作るというワークショップでは、おもちゃをつくる活動を通して、生き物の生態に関心を持つきっかけを作ることにつながった。その点では③の自然環境系との関係も深い。そして①から⑦のいずれも参加者自身

が意識する、しないに関わらず現状帰属しているコミュニティ（家族、学校、会社、地域）とは別のつながりを作っていることもワークショップの特徴といえる。見知らぬ人同士が協力しあい、また互いに作ったものを鑑賞したり、作りながら情報交換することは普段行われている学校教育とは違う意味合いが込められている。学校や保育園、幼稚園では時間的、技術的、内容的に困難な活動を行うこともあるが、それだけでなく、普段行なっている活動を外部の人々を行うことに意義があると考え。そしてワークショップで出会う人との交流だけでなく、自分自身で作り上げた物事を客観的に見ることで新たな発見をする場でもあると言える。このようにさまざまな分類はされても根幹にあるものは新しい学びを発見する装置としての役割をワークショップが担っているのである。

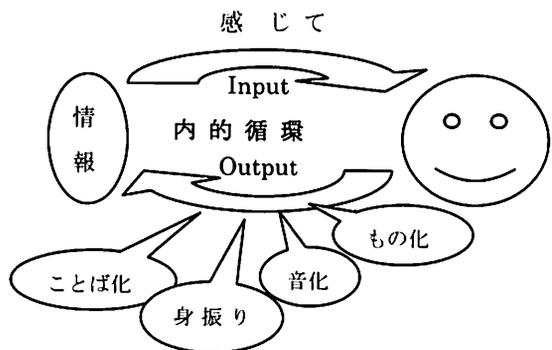
（3）造形ワークショップの意義

西田真哉は体験学習法の循環過程の図を示し、体験することで新たな発見をする。それは自分自身でも他の人間の指摘によっても構わない。それを分析し自分でもしくはディスカッションからキーワードを導き出し、概念化する。そこからさらに体験を重ねることで学びを深めていく。それがワークショップの形であると示した。これは平田智久の著す子どもの表現活動における「感じて」「考えて」「行動する」という「内的循環」ⁱⁱと同じことを意味するのではないかと考える。つまり子どもたちは様々な外部の刺激を受け、感じたことを表現する。それは言葉や身振り手振りや歌や描いたり作ったりと様々だが、その表現した結果をさらに自分自身で感じて表現する。その繰り返し「内的循環」であり、子どもたちの感性を育むものだとしている。このことを踏まえればワークショップという形は、大人たちにとっての幼少期の学びの形を再構築していると言える。

その表現活動のひとつである造形表現は「内的循環」を視覚的、触覚的に感じ取ることができる要素を持っている活動と言える。目の前に素材に触れ、それを自分の手で変化を加えたりすることで新たな形が生まれ何かに見立てる遊びをする。そしてその見立てのイメージを確かな形へと具現化しようと手を加えていく作業が造形活動である。それは「体験型学習の循環過程」の分析、概念化、さらに体験へと続く行為と同じである。



西田真哉作成図参考「体験型学習法の循環過程」



平田智久「内的循環論」の図（※p11図1-1参考）

(4) ファシリテーターの存在

ワークショップには先生・講師の代わりに活動を円滑に進める役目を担うファシリテーター (facilitator) が存在する。ファシリテーターの語源ファシリテート「facilitate」はもともと「容易にする」「促進する」などの意味を持ち、ワークショップの参加者主体の学びを促進する「進行促進役」「引き出し役」「そそのかし役」などといわれている。宮城県立美術館で教育普及活動に長年関わっている造形作家の齋正弘は「造形ワークショップの広がり」高橋陽一編³⁾の中で教育の伝達方法として4つの形を示している。

- ①ティーチ (teach)
- ②インストラクション (instruction)
- ③インタープリテーション (interpretation)
- ④ファシリテーション (facilitation)

さらに齋はファシリテーションの位置付けをティーチ (teach) ではなく「方向はあるが目標はない。目標は参加者のみにある。」としている。その目標実現のための相談にのることがファシリテーションの役割と述べている。このファシリテーションはまさに保育者の役割そのものであると考える。保育者は子どもたちの活動を見守り、彼らが表現しようとしていることを理解した上で、視点を共有しつつ方向性を強要しない存在であるからである。

海洋学者のレイチェル・カーソンは著書「センス・オブ・ワンダー」⁴⁾の中で以下のように述べている。「わたしは、子どもにとっても、どのようにして子供を教育すべきか頭をなやませている親にとっても、『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要ではないと固く信じています。」

つまり、子どもたちに何かを伝えようとする際に、これまでの経験や事前に詰め込んだ知識を伝えるよりも、自然なり創作活動なりに子どもたちと同じ場に身を置きながら、子どもたちと共に感動することが重要だということである。子どもたちの向かっている方向と視点を同一にし、彼らの見つけた物事に共に感動し、発言に耳を傾けながら何をするのか見守り、迷っていたら相談に乗ったりする存在として保育者はファシリテーターであると言える。その観点からワークショップを経験することはファシリテーション能力を高めることになり、保育者としての技量を高める機会であると考えられる。

4. 造形ワークショップの実践

造形ワークショップは、素材、技法、対象年齢や人数などで様々な方法がある。今回は小学生やその保護者、大人も含めた造形ワークショップを企画、実践したものを取り上げる。小学生は幼児の未来の姿である。小学生が出来ることを把握することは、技能的発達を知り活動の展開を考える上で保育と関わり重要な意味を持つと考える。様々な年齢の子どもたちの造形活動に参加することで、学生たちが子どもの技能的発達だけでなく、子ども同士の関わり、実践する先生や大人たちの言葉がけ、援助の仕方を直に学び取ることができた。4つの実践例をもとに検証していきたい。

(1)「ナンデモ絵筆で描こう」

場所：愛知県芸術文化センター J室

日時：2010年10月31日 PM2:00～4:00

対象：小学生 22名

参加学生：8人

1) 概要

2010年8月から10月にかけて行われたあいちトリエンナーレの企画のひとつ、キッズトリエンナーレの中で筆でないもので絵を描くワークショップを企画、実践した。愛知県芸術文化センター6階J室にて、デッキブラシ、モップ、スポンジや霧吹きなど筆でないもので木を描き、会場全体を絵の具の森にしようと参加者、援助の学生とともに作りあげた。

2) 準備

地場産業の一つ豊橋筆を取り上げ、筆の出来上がる過程をDVDで鑑賞後、筆で書くこと、描くことの面白さを伝える。一方で書家や画家が身の回りにあるものを筆に見立て表現していることを紹介し実際にナンデモ筆を試みながら材料確認をした。スポンジや霧吹きなどで絵の具の伸び具合や水の量を調整、また実践する子どもたちが汚れないように簡易カップを準備製作した。参加者8人全員の打ち合わせは1回、当日の流れを把握すること、役割分担などを話し合った。

3) 実践

- ① 会場の床と壁にブルーシートを敷き養生した上に白い紙を貼り敷き詰める。
ナンデモ筆の材料を並べる
- ② 豊橋筆についての説明をした後、ナンデモ筆を実演しながら描き方の例を見せる。
簡易カップを着せて、筆を選んで活動開始（筆は何度も替えたりすることができた）
- ③ 壁の白い面にひとり1本ずつ木を描き森を作ろう。
描画活動担当と材料手配担当に分かれ、子どもの活動を援助
- ④ 小休止の後中央床面の紙にナンデモ筆や手足を使って花畑を描こう。
- ⑤ 活動終了後、保護テープをはがし、あいちトリエンナーレのマークを中心に記念撮影
- ⑥ 材料の片付け後終了



絵の具各種



ナンデモ筆



壁に木を描こう

保育実践につながる「場」としての造形ワークショップ



子どもたちと一緒に描く

記念撮影

4) 学生の様子

活動を終えて

参加した8人の大学生はナンデモ筆など材料の準備から後片付けに至るまで役割分担して行っていた。子どもたちが全身を使って自由に絵を描く姿は学生にとって大きな刺激になったようだ。活動援助については子どもたちがどうしたいのかを聞きながら材料を提案したり、一緒に絵の具まみれになるなど距離を適度に取りながら援助をしていた。またワークショップの流れ自体にも筆者の進め方に問題があったのではと指摘するなどよりよいワークショップにしようとする姿勢が見られた。

(2) 「回る木のおもちゃをつくろう」

1) 概要

夏休みのものづくり企画の一環で、小学生（1年～6年）とその保護者で回る木のおもち（メリーゴーランド）を作る活動を実践した。

対象：小学生とその保護者

場所：刈谷市総合文化センター 創作活動室

日時：2011年8月10日 AM10:00～12:00

対象：小学生とその保護者10組、20名

参加学生：6人

2) 準備

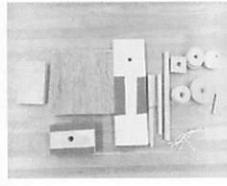
事前準備として回る木のおもちゃのサンプルを手に入れ採寸し、よりコストを抑えた部品構成になるように筆者と学生とでアイデアを出し合いながらデザインの見直しをして、材料の購入、裁断仕分けを行なった。「回る木のおもちゃ」の18の木材部品、タコ糸、紙粘土のアイテムなど20組分用意した。檜材、ベニヤ、丸棒など多岐に渡る木材部品を裁断加工、メリーゴーランドで回るアイテムを紙粘土で製作した。お菓子の型抜きを用いて車や飛行機、ハートや星などを製作した。



木材を削る



ボール盤で穴開け作業



キット一式



回るアイテム (紙粘土)

3) 実践

- ① 完成品を見せながら活動の流れと注意事項を説明
- ② 作業開始、親子たちに学生の活動援助が入る
- ③ 回転する仕組みを説明しながら組立を援助する
- ④ 回るアイテムの紙粘土に水彩絵の具に木工用ボンドを混ぜて着色する
- ⑤ 完成した子から記念撮影、アンケート回収後片付け

4) 学生の様子

準備において

メリーゴーランドの採寸やノコギリや電動ボール盤による木材の裁断など、学生にとって初めて経験することも多かった。戸惑いながらも道具を使う面白さ、同時に危険性も感じ取っていた。準備に時間的、経済的コストがかかるということも企画に携わることで実感しているようだった。また時間的制約の中での組み立やすさを考え、釘やネジを使わない構成を考え、部品の組み合わせに苦心していた。

活動を終えて

実践当日では参加対象が小学生であるため、低学年でもできるようにノコギリや釘を使わずに組み立てられる仕組みにしたことで時間内に活動を終えることができた。接着や組立、色塗りと作業も様々な段階があったので子どもたちは飽きることなく集中して製作していた。保護者の適度な手助けもあり順調に工程は進んだ。

学生は子どもたちが組立てに苦心する場面での援助や紙粘土に色塗りしている子どもに声をかけることに努めた。製作について木工用ボンドの使い方、紙粘土に絵の具を塗る際の注意、回転部を未乾燥のまま触らないなど活動の中で適切にタイミング良く声をかけることができなかった事を反省していた。子どもたちがおもちゃを回す姿に興味を示し、自分で作ったものが回るという達成感を得ているようだった。着色の場面では紙粘土のちょうちょの形を別の生き物に見立て塗っている発見をしたり、子どもの活動を細部にわたり観察する姿が見られた。



回転するアイテム



回るか試運転



楽しい色塗り



記念撮影

(3) 「牛乳パックで海の生き物をつくろう」

1) 概要

蒲郡市生命(いのち)の海科学館での生き物に関する工作体験企画のひとつとして参加した。牛乳パックを使って足やヒレがパタパタ動く海の生き物おもちゃを企画・実践した。海に棲むまたは棲んでいた生き物を4種類取り上げた。①爬虫類・ウミガメ②鳥類・ペンギン③魚類(正確には節足動物)・タコ④魚竜(白亜紀まで生息していた海棲爬虫類)・イクチオサウルスの製作を行なった。親子製作体験として牛乳パックで基本構造を作り、色画用紙、シール、ビーズ、モールなどで装飾を付けて自分なりの生き物を作った。

場所：蒲郡市生命(いのち)の海科学館 実験工作室

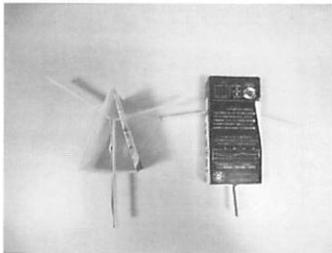
日時：2011年10月22日 PM2:00～4:00

対象：小学生とその保護者20組、40名

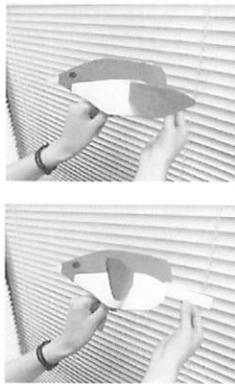
参加学生：4人(内2人は撮影係)

2) 準備

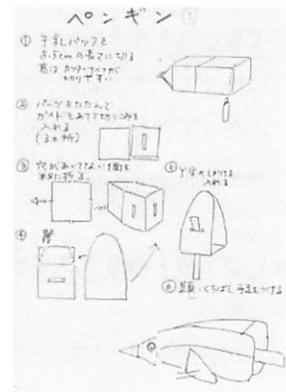
製作のポイントとなる牛乳パックの仕組みを作り、動きを確認する。様々な生き物に興味を持ってもらうために4種類の生き物を考えた。参考とした本に掲載されたペンギンを試作した後、科学館の主なテーマである海にちなんだものとしてタコ、ウミガメ、收藏品である魚竜イクチオサウルスを試作した。それぞれの組み立て図も作成した。飾り付けに必要な画用紙、シール、ビーズなどは科学館で用意してもらうことを確認した。



手足の動く仕組み(2種)



ヒレの動き



組み立て図

3) 実践

- ① 見本のおもちゃ(4種類の海の生き物)の動きを見せて作りたい生き物を選ぶ
- ② 型紙と牛乳パックを配り、製作開始。
- ③ ヒレや手の動くつくりを気を配りながら製作。飾り付けにシールやビーズ、モールなどを貼る。
- ④ 完成したら、動かして遊んでみる。出来た人から記念撮影

⑤ 道具や型紙などを片付けて完成



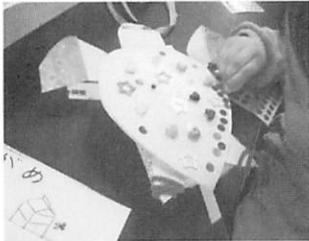
型紙の準備



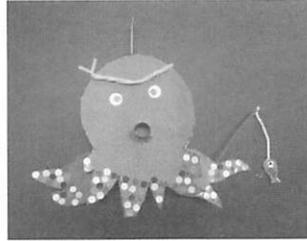
難しい作業の援助



シールで飾りつけ



ウミガメ



タコの魚つり



出来たら動かしてみよう

4) 学生の様子

活動を終えて

活動の援助した大学生はインタープリターと呼ばれる科学館のスタッフの的確な声かけやアドバイスに感動していた。事前におもちゃを作っておけば、製作のポイントも理解した上でもっとうまく説明や援助が出来たと反省していた。ビーズやモールなどでカラフルな飾りつけを工夫する姿を注意深く観察していた。部屋の後ろまで声が聞こえなかったので、大まかな説明は前で細かな説明はスタッフで手分けして行えばよかったと会場全体の流れにも意識が向くようになった。

(4) フェルトのカラフルボール

1) 概要

刈谷市学びの広場の企画の一つとして開かれたワークショップ。様々なものづくり体験コーナーの中で特別な道具を使わず作れるものを計画した。羊の原毛を使ってお湯に溶いた石鹼水でフェルトのボールを作る実践を展開した。

場所：刈谷市総合文化センター 創作活動室

日時：2011年11月27日 1部10:00～12:00 2部13:00～15:00

対象：小学生以上 40名

参加学生：4人

2) 準備

- ・ 羊の原毛を40玉用意し、フェルトのボールを作った。

保育実践につながる「場」としての造形ワークショップ

- ・ 45℃程度のお湯に液体石鹼を溶かし泡立て、原毛に泡をつけながら丸めていった。
- ・ 芯になる丸いものを集め試作した。(ビー玉・スーパーボール・海岸で拾った丸い石)

3) 実践

- ① 見本を見せて出来上がりを確認させ、実際に1つ作って見せる。
- ② ボールにする原毛を選ぶ。数種類混ぜて様々な模様が生まれる。
芯になる物を選び(石、ビー玉など)原毛を包み込むように巻きつける。
- ③ お湯を張ったバットに液体石鹼を入れ泡立てる。(40℃以上のお湯 2l に対し液体石鹼20ml)
- ④ 原毛を巻きつけた塊に石鹼水をかけながら両手でこすりながら丸めていく。
(毛を絡ませるように何度も洗っては石鹼をつける)
- ⑤ 十分に絡まって固まりができたなら石鹼をしっかり洗い流し
タオルや新聞紙の上で乾燥させて終了。ビニール袋に入れて持って帰る。
- ⑥ 片付けをして終了



たくさんのフェルトから選ぶ



石けんで洗いながら丸める



カラフルボールのできあがり

4) 学生の様子

活動を終えて

小学生以下から50代以上の男女が参加しそれぞれに柔軟に対応していたようだった。どうして石鹼を混ぜるのか説明に困った。特別な道具を使わずにできるので幼児も一生懸命取り組み、うまく出来なくても大人に頼らず自分で丸めようとする子どもの姿があった。何個も作ろうとする意欲的な活動になった。子どもたちと一緒に緩やかに見守る活動が展開出来ていた。

5. 考察

4つの実践例から造形ワークショップに大学生が参加することでどんな学びをしているかを検証する。

(1) 準備することの重要性

子どもたちが自然に活動を行うために事前に必要な材料や道具を揃えたり、試作などをして製作過程を十分に把握しておくなどの準備がとても重要であることを学んだ。ワークショップが始まればあらゆる事態を予測し対応していかなければならない。造形に関わるワークショップに企画から関わることで、製作過程を把握し子どもの創作活動の援助の見通しを立てることができた。

4. (2) の回る木のおもちゃでは木材が破損した場合の予備の確保や、4. (3) の牛乳パックの

おもちゃでは参加人数が増えた際の型紙を追加製作するなど、余裕を持った計画を立てて準備しておくことが必要であることを認識した。

試作も重要である。年齢によって製作、活動にかかる時間は変化するので、限られた時間内で活動が完了するような計画を立てなければならない。

(2) 参加者と同じ方向を見ること

限られた時間、空間の中で起こるワークショップの科学反応は予測不可能であるが、子どもたち大人たちを大いに興奮させて全体として大きな活動となる。ただしそれぞれ別々の方向を向いている可能性もある。ファシリテーターはひとりひとりの活動にも目を配り、今何をしようとしているかを相談しながら、あるいは見守りながら必要があれば手助けをする。そのような位置関係がふさわしいと考える。4. (1) のナンデモ筆も道具の扱い方をアドバイスしたり、時には同じように絵の具にまみれることで子どもとの距離を縮め、より活発な表現を導くことに成功することを実証したと言える。それは強要することなく目線を合わせたことによるところが大きい。言葉がけも同様に、上手下手を表すような言葉ではなく、具体的な活動や表現を問いかけることが子どもの表現の行き先を妨げないと考える。また作品が完成したときは同じくらい喜ぶなど感動を共有することも重要である。

(3) 造形ワークショップのその先にあるものを意識する

造形ワークショップでの大学生の役割はファシリテーターとして子どもたち、大人たちが目標である製作物に対してどのように取り組んでいったらいいかを一緒に考え、そのためのアドバイスや援助を行う役目ではなかったかと改めて振り返ることができた。また全く同じ素材や技法を用いても、同じ結果になることはない。それは参加する人々が違うこともあれば、ファシリテーターが異なることもある。しかし、その条件が全て同じであっても同じワークショップにはならない。なぜなら時間も人も常に変化しているからである。それらを十分理解した上でファシリテーターは同じワークショップを繰り返し行うことでより活動の質を高めなければならない。それは作品の出来栄えという問題ではない。

造形ワークショップを企画する側は上手にきれいに時間通り、予定通りに出来上がることを優先しがちである。作品ができればよいという傾向に陥りやすいが、それは本来のワークショップのねらいではない。結果を残すことは前提としてあるものの、そこに至るまでにどのような手順を踏んだのかを重要視すべきである。同じ規格のものを製作した場合は飾り付けや着色でどの部分を自分なりに工夫を重ねたかを見つけ認めることが製作した本人になる。作品が出来上がったというより、自分自身が作りながら何を思っていたかの方が大切なのではないかと考える。先述のレイチェル・カーソンの「知ることは感じることの半分も重要ではない」と同じように、造形ワークショップでは「完成することは作る過程の半分も重要ではない」と言える。

保育者を目指す大学生がワークショップの中で共に活動する対象が幼児でなく小学生や中学生以上の大人たちであることの意味は何なのか。それはどの年齢であっても自分自身が発見した事を互いの対話の中で情報交換し、物を作り上げたり活動を進めていく作業であるから年齢が問題

保育実践につながる「場」としての造形ワークショップ

なのではない。ワークショップに参加することはで(保育者)も学びを深める仕組みだと考える。ワークショップは参加した子どもたちだけでなくファシリテーター(保育者)にとって大きな学びと経験になり実践の幅を広げていける依代のひとつである。

6. おわりに

中野民夫はワークショップをする上で大事なことは「方法、手段であっても目的ではない。」と述べている。造形ワークショップならば、そこに参加して何を作った、描いたという事が目的ではない。それらの創作活動を通じて子どもたちや活動をともにした大人たちが何を感じ考えたのか、どんな交流がなされ伝えあったのかということが重要である。保育の現場も同様である。「ワークショップはちょうど子どもたちの『遊び場』や広場のようなもの。安心して存分に遊べる空間とお互いのよい関係という環境が整えば、もう子どもには戻れない私たちも、いつの間にか自然に教え学びあったり、遊びの天才であった頃のように想像的になれるのかもしれない。」遊び場での遊びは終わりが無いものである。何が出来たかよりも遊びの最中に何を感じているか、子どもの気持ち、イメージを共有したいならば同じように遊びの中に身を置くことではないか。造形に関わるワークショップではまず自分が作って楽しむ。それを繰り返して深めていくことが保育者としての技術だけでなく保育の質を高めることにつながっていくと考える。

【注】

- i 中野民夫 「ワークショップ -新しい学びと創造の場-」 岩波新書 2001
- ii 平田智久 小林紀子 砂上史子 編著 「最新保育講座11 保育内容『表現』」 ミネルヴァ書房 2010
- iii 高橋陽一 編 「造形ワークショップの広がり」 武蔵野美術大学出版局 2011.3 p41
- iv レイチェル・カーソン 「センス・オブ・ワンダー」 佑学社 1991 p22

【参考文献】

- 齋 正弘 「大きな羊のみつけかた「使える」美術の話」 仙台文庫 2011.1
- 高橋陽一 監修 杉山貴洋 編集 「ワークショップ実践研究」武蔵野美術大学出版局 2002
- 渡辺一洋 「自然環境を舞台にした造形ワークショップの取り組み」 環境芸術
環境芸術学会論文集 2010 p71-80

(名古屋経営短期大学子ども学科 講師)